

大学博物館と所蔵写真資料について

— 佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵西田直二郎写真資料を中心に —

斉 藤 利 彦

はじめに

現在、写真は「非活字資料」として、近代史や民俗学、博物館学といった研究分野で、その資料的価値を高めている。というのも、写真の被写体内容そのものに資料的価値があり、加えて、画像としての一般性から、人々に与える情報量が多いからである。このような観点から、写真は近代社会や民俗を多面的、有機的に考察できる資料であると同時に、一般市民に近代社会や近現代の生活・生活文化の理解をうながすことのできる貴重な文化財なのである。

近年、東京大学の文化資源統合アーカイブのプロジェクトによって「歴史写真」が概念提示されているが、この歴史写真とは、従来の写真技術史的考察や撮影者研究が中心であった古写真研究²と対比して、文字史料の傍証資料としてではなく、その「史料」性の価値を見出し、歴史研究を推進させるうえでの十分な情報を含むする写

真資料のことをさす。現在、情報学的観点からの分析が行われるなど、研究活用がみられるようになって⁽³⁾いる。

また、写真資料の保存と整理・活用に關しては、上述した東京大学のプロジェクトのほか、国学院大学や神奈川大学、立命館大学的大型プロジェクトが所蔵写真資料の整理と保存、活用の実践を研究報告しているのは周知のとおりであり、多大な成果をあげている。⁽⁴⁾このほか、日本写真学会の画像保存研究会がまとめた『写真の保存・展示・修復』⁽⁵⁾や同学会誌特別号『写真と文化財との関わり』⁽⁶⁾、大林賢太郎氏や全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『劣化する戦後写真 写真の資料化と保存・利用』⁽⁸⁾などが、今日的資料としての「写真」保存とその利用などの実践方法を詳説している。このように従来、写真資料の整理方法に關しては、文献史料や考古資料、民俗資料と比較しても立ち遅れている観があったが、デジタル技術の向上や各大学、研究機関、学会の研究によって整理・保存方法や活用方法が体系化されはじめており、これまでの指摘や研究課題は克服されつつある。

一方、博物館学では、写真(スチール写真)は博物館資料として人文科学系、自然科学系ともに資料のひとつに数えられるが、その性格は二次資料と位置づけられている。ただしその客観性から、きわめて信頼性の高い資料として評価され、二次資料の中核をなす。⁽⁹⁾写真資料を含む「画像」資料は、その視認性・視覚性ととも、なによりも一般性を有するため、博物館展示への活用が容易である特徴をもち、昨今の博物館では、写真資料に關して、収集と保存、展示活用などがはじめられている。

ところで、大学博物館は一般博物館以上に、写真資料という、重要な近代の「文化財」が集積され数多所蔵していることが多い。そのため、写真資料の整理・保存、データベース公開による活用、さらには、研究資料としての写真資料の分析方法論の提示、写真資料を用いた展示活用などが求められるといえる。では、大学博物館と写真資料はどのような関係をもつべきなのであろうか。本稿は大学博物館と写真資料について、その活用面につ

いて、展示だけではなく、事業企画という面を中心に考察をすすめてみたい。

第一章 大学博物館と所蔵写真資料

第一節 大学博物館について

大学は平成一九年度（二〇〇七年度）以降、少子化・全入化時代をむかえ、取り巻く環境、特に経営環境の舵取りが難しくなっている。このようななか、全国の大学では大学博物館が設立される傾向にあり、ひとつのブームともいわれている。京都にある宗門大学のひとつ、龍谷大学は親鸞上人七五〇年大遠忌にあわせ、平成二三年（二〇一一）四月、「龍谷ミュージアム」を開館する。関連する新聞記事（京都新聞朝刊（二〇一一年三月三日））のなかで若原道昭学長は、このミュージアムはこれからの同大学の特色を象徴するものである、とコメントを寄せている。大学博物館設立の動きを考える大きな要素であるといえよう。

近代以降、日本の大学がこれまで調査研究活動などを通じて蓄積してきた学術標本・資料群は三千万点を超えるともいわれており、その質量はおそらく、全国自治体設置の登録博物館や博物館相当施設などが所蔵する資料群に匹敵するであろう。

わが国の各大学が所蔵する学術標本や資料群は、世界的にも研究教育上の資料といえるが、欧米の大学と比しても、本来、高等教育機関の大学が持つべき大学博物館、大学文書館を有していないことが多いため、それらの

資料の整理・保管などに問題が生じている。それは同時に、研究教育面での利活用の進展をも妨げ、さらに、国内外の研究者が資料の照合をした際、保管状況や、資料の現状に失望する、といったこともあるという。したがって、昨今の大学博物館設立の動向はこれらの問題の解消につながるといえる。

いうまでもなく、博物館の使命と役割とは、資料を正しく保管し次世代に継承するとともに、展示公開を行い、一般の人びとに資料とその歴史や特質を伝えることにある。このことは博物館法第二条に基づきのように規定されているとおりである。

歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（社会教育法による公民館及び図書館法（昭和25年法律第118号）による図書館を除く。）のうち、地方公共団体、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人（独立行政法人（独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）第2条第1項に規定する独立行政法人をいう。第29条において同じ。）を除く。）が設置するもので次章の規定による登録を受けたものをいう。¹⁰⁾

地方自治体の設置する博物館は同法第二条のもと、館ごとに、それぞれ特色ある使命と役割、機能を掲げ、運営されている。たとえば、大阪歴史博物館はその使命を「歴史と対話し、現在、そして未来を考える」とし、具体的には、

大阪歴史博物館は、大阪に住む人たちをはじめとし、すべての人たちに対して、この地で培われた歴史遺産・文化遺産に基づき、これまでの蓄積を踏まえながら、より広い観点に立つて充実した活動を行っていきます。

それを通して、ともに都市大阪の歴史に対する理解を深め、「歴史との対話」を常に大切にしながら、現在の社会・文化を考え、よりよい未来の創造をめざしていきます^⑪。

と定めている。このような使命のもと、活動目標として、①「モノ」や遺跡を通して社会や文化を考える博物館へ②学びの意欲をサポートする博物館へ③子どもを育む博物館へ④つながり、のびてゆく博物館へ⑤社会に貢献し、愛される博物館へ、といった五点を定めている。大阪の歴史遺産・文化遺産の保管と継承、都市大阪の理解を深める展示を通して、次世代への社会教育活動を行なうこと、つまり、大阪市の歴史遺産・文化遺産の次世代への継承と、人びとへの啓蒙、そして生涯教育の場としての博物館という理念と活動方針が定められているのである。一方、大学博物館の使命と役割は、設立法人の性格や設立の意図、背景などが多様であるため、一概に論じることがむずかしいが、大学博物館等協議会の声明にある、つぎのような一節がひとつの指針といえよう。

大学博物館等の公開施設は、大学が社会に対して果たすべき説明責任の一端を担う施設であるとともに、学術資源の研究教育利用の促進のための施設でもある。教育目的を主とする展示や様々な実験的展示を意図するなど、大学博物館等施設の展示目的はさまざまである^⑫。

つまり、大学博物館は大学が研究教育活動のなかで蓄積した学術財産・資源を保管し、次世代に継承するとともに、それを内外の研究者が活用できる体制を整え、さらに研究成果を社会へ還元していくことにあると考えてよい。ただし、設立の背景・経緯がさまざまであり、展示活目的・活動も大学の研究成果展、あるいは大学教育の理解を促進させるための教育展示、博物館学の実習展示、実験的展示といった具合に、その意図と目的は各館多様なのが特徴である。

そこで、大学博物館の機能と役割・沿革を、試みとして、京都市内にある大学博物館で具体的に確認してみたい。

①京都大学総合博物館

現在、京都大学には大学博物館として、京都大学総合博物館が設立されているのは周知のとおりである。学内の学部にある学術標本や資料を中心に、文化史・自然史・技術史方面の三部門の展示と研究活動がなされ、多くの成果を生んでいる。

京大では創立当初から大学博物館の設置を構想されていたというが、具体的には文科大学に陳列館を附置することが、京都帝国大学創設時の構想に含まれていた。その背景は、大学が十全な研究・教育活動を推進していくための拠点として、学術標本を収蔵・管理するための施設が必要との考えからであった。

この考えのもと、明治三十年代より一次資料の収集が開始されていたが、同三九年（一八九六）に文科大学が創設され、翌四〇年に史学科が開設されると、当初の構想を現実のものとし、文科大学の特色とするべく、史料の収集はより盛んに行われた。古文書史料は三浦周行（当時、講師。のち教授）、考古学資料は濱田耕作（当時、講師。のち教授）、地理学関係資料を教授の小川琢治が担い、さらに中国関係資料については内藤虎次郎（湖南、当時、教授）が蒐集するなど、収蔵品は充実していった。⁽¹⁴⁾三浦が在任中に蒐集した古文書史料は二万点に及んだという。のちに国史学第一講座教授となる西田直二郎は土俗学・民族学関係資料を集め、所蔵資料の新分野を築いた。⁽¹⁵⁾

当初、これら蒐集史料群は古文書室と地理学・美学美術史教室に保管されていたが、保存施設建設急務の観点から、当初計画されていた陳列館構想が進められ、明治四四年（一九一〇）、図書館北側に建設されることとなり、大正三年（一九一四）四月に落成し、翌四年、大正天皇即位式が京都御所で挙行されたのを機に、開館式が一月に挙行された。⁽¹⁶⁾その後、同一二年に第二期工事が行われ東面煉瓦造りの建物ができ、同一四年には第三期工事と

して東北隅鉄筋コンクリートの建物が造られた。昭和四年には北面の建物が第四期として工事され、これをもって陳列館は全館完成となった。特に今回の工事によって写真室が北面建物に移転し拡張している。

このように陳列館は順次、規模と資料の充実が図られていったが、史学科各研究室は当館落成とともに移ったため、これより半世紀は、史学科における「陳列館時代」といわれている。⁽¹⁷⁾その後同七年、陳列館北側は建坪三十坪の平屋が増築され、史学科第一教室となり、国史第一陳列室・第二陳列室は階上にまとめられた。⁽¹⁸⁾

戦後、この陳列館は博物館相当施設の指定を受けることとなる。昭和三〇年（一九五五）一二月、当時、陳列館の主事であった梅原末治文学部教授を中心にして、文学部は文部省から博物館相当施設の指定を受け、同三四年（一九五九）には文学部博物館と改称し活動したが、その後、老朽化が深刻化したため改築されることとなり、昭和六一年（一九八六）に新館が竣成された。

一方、理学部・農学部・教養部などでも、開設以来たゆみなく資料が収集され、研究に用いられてきた学術標本資料が膨大な数量となり、その十分な管理と活用必要性が指摘されるようになり、三学部合同調査委員会によって、自然科学系の博物館設置構想が立ち上がる。

この構想はのちに、すでにある文学部博物館と新設となる自然史博物館とを統合した「京都大学総合博物館」というかたちのプランとして形作られたが、工学部・農学部などに収蔵される機器、実験器具、資料についても調査がなされ、歴史的価値の高い技術史関係資料のコレクションが多数存在することが確認されたことによつて、京都大学では二五〇万点以上の学術標本資料を所蔵することが明らかになる。ここに至って、文化史、自然史、技術史系の三館構想がもちあがるが、最終的に一館三部門系の「京都大学総合博物館」設立となり、平成九年（一九九七）四月一日、発足した。⁽²⁰⁾

このような歴史と経緯をもって設置された同館の設立目的は、

京都大学には、過去100年間に収集・研究されてきた学術標本資料・教育資料が多数保存されてきた。その内容は、国宝・重要文化財やそれに準ずる文化財、あるいは国際的に貴重なタイプ標本など、文化史・自然史・技術史の各分野にわたる重要な資料であり、その豊かさは他の追隨を許さないものである。

京都大学総合博物館は、大学の各学部や研究所などに個別に保管されていたそれらの一次資料を適切な環境の下で集中的に保管・管理し、広く学内外の先端研究や教育において活用されることを促進し、かつ、その成果を一般に公開することを目的として設置されたものである。⁽²⁾

とあるように、大学が所蔵する学術標本や資料の集中的一括保管と管理、それらの先端研究と教育への活用、成果公開による社会への還元というものである。

②大谷大学博物館

大谷大学では、近代化100周年記念事業の一環として、真宗総合学術センター響流館が建築されたが、その一階に設置されたのが「大谷大学博物館」である。設置にあたっての構想は、本学図書館が収蔵していた貴重資料、考古遺物、民俗資料などの文物を含む資料の適切な保管と調査研究、博物館学課程の充実化、生涯学習など社会的要請への対応などを目的に策定された。さらに、平成一五年(二〇〇三)一〇月、図書館所蔵の貴重資料を中心に、歴史学科などに保管されていた資料を収蔵品とする博物館として開館した。

同館では、資料収集、整理、保存といった博物館本来の機能、真宗・仏教文化財への認識を広く社会に普及するための「真宗・仏教文化財センター」としての機能、仏教文化財に造詣の深い特色ある学芸員養成のための学

習・実習施設としての機能といった三機能を主としている。

特筆できる点は大学本体の設立母体である浄土真宗や仏教文化財の知識を広く社会に普及するための「真宗・仏教文化財センター」機能を持つ点、博物館学芸員養成、実習施設としての機能に関しては、特に仏教関係の文化財に造詣の深い特色ある学芸員の養成を眼目に置いている点である。これらは大谷大学という、宗門大学の大学博物館としての性格と特徴といえるであろう。⁽²⁾

③ 佛教大学宗教文化ミュージアム

佛教大学では平成一五年度より五カ年、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選択され、広沢校地にアジア宗教文化情報研究所を設立、漢字園のアジア地域を中心として、宗教文化に関する調査・研究を行うとともに、有形文化財については展示スペースで、無形文化財は併設する劇場「宗教文化シアター」において動態展示の一環としてシアター公演を行い、研究成果を発信した。

同研究所は平成二〇年(二〇〇八)四月、「佛教大学宗教文化ミュージアム」として改称・改組され今日に至っている。その活動は、母体であるアジア宗教文化情報研究所の調査・研究を引き継ぎ、「シルクロード部門」「歴史文化部門」「浄土宗文化部門」という三分野の研究部門をもち、その研究成果を展示室、宗教文化シアターにおいて公開している。本館の設立趣旨と事業、活動目的は、

人文科学領域の研究の発展に寄与すると同時に、広く一般市民に対して宗教文化に関する理解を促し、さまざまな生涯学習の場と機会を提供することによって社会貢献を行うことにあります。⁽³⁾

とあるように、人文科学の立場から宗教と宗教文化に関する研究を行い、その成果を社会に対して発信すること

を目的としている。その際、展示施設である展示室での公開とともに、併設する宗教文化シアターにおいて、シアター公演を開催し、広く市民への発信を行っている。シアター公演は動態展示の一環としてのコンセプトのもと、無形遺産、無形民俗遺産の公演を実施しているが、宗教文化シアターの存在は、全国にある大学博物館において特色のある施設であり、活動であるといえる²⁴。

当館の展示は基本として研究部門の研究成果を展示活動に反映させている。その一例として、研究所時代より継続している、日本所在の大蔵経の調査・研究があり、これまで諸種の大蔵経の研究を実施してきた。その研究成果の一端として、平成二二年(二〇一〇)一〇月、初雕高麗版大蔵経発願一〇〇〇年を翌年にひかえることから、これを記念して、忍激上人を中心にした高麗版大蔵経をテーマにした特別陳列「日本仏教と高麗版大蔵経―忍激上人を中心として―」を開催した。同時に、同年が高麗版大蔵経と黄檗版大蔵経とを対校された法然院中興第二世忍激上人の三百年御遠忌にあたるため、法然院が所蔵する忍激上人の大蔵経関係資料の調査を行い、『法然院忍激上人と大蔵経対校録』としてまとめた。

一方、宗教文化シアターでは研究所以来、通算三三回(二〇一一年一阶段)を数え、年四回の公演を実施し、平均入場者数は座席数と対比して、一〇〇パーセントを越える観客動員を誇る。同シアターでは、京都市内の民俗芸能や口承文化・芸能、日本、アジア、世界の音楽などの公演を行っているが、上述したように、これらの上演は宗教文化・宗教と関係する芸能の「動的展示」という性格をもたせ、上演による情報発信と、公演と実演を記録撮影し、記録映像としての資料化を図っている。また同シアターの新事業として、平成二一年度から映像上映会も実施している。同年度はドキュメンタリー映画「ほんがら」を上映するなどし、京都とその近隣地域の民俗や文化などの理解を深める活動も行っている。

第二節 大学博物館展示と写真資料

①大学博物館の展示について

大学博物館は前述したように、設立意図・目的が多様であるため、展示目的もさまざまなである。設立母体の大学法人・創立者・大学の歴史や理念に関する展示、あるいはその大学のこれまでの研究教育活動の成果の展示、存立する地域の理解を促進する展示、博物館実習展示、博物館学の展示方法などを実験的に行なう実験展示などである。

これらの展示目的のなかでも常設展やシリーズ展示で扱われることが多いのが大学史関係展示である。この展示目的が大学博物館のもっともポピュラーな展示といえよう。たとえば、大谷大学は、毎年四月「大谷大学のあゆみ」というタイトルシリーズのもと、同大学の歴史に関わる展示を行っている。平成一六年(二〇〇四)四月、春季企画展として始まった同じシリーズは、同年「清沢満之と真宗大学」展を皮切りに、同一七年(二〇〇五)五月「大学の前身 学寮の時代」展、同一八年(二〇〇六)四月「赤レンガの学舎」展、同一九年(二〇〇七)「歴代学長の肖像 明治・大正・昭和」展が行われ、同二〇年(二〇〇八)からはこれまでの展示をリニューアルするかわりで、同年「清沢満之と真宗大学」、同二一年(二〇〇九)「大学の前身 学寮の時代」展、同二二年(二〇一〇)「赤レンガの学舎」展を開催している。

また同志社大学では、設置法人の同志社と同大学のアーカイブ機関でもある同志社社史資料センターが、展示施設であるNeesima Room (ハリス理化学館)において、年二回の同志社史に関連する企画展を開催している。第一回が「徳富蘇峰」展、第二回が「手紙で見る新島襄の生涯」、第三回「同志社の開校と京都」で、近年の展

示開催を確認すると、第三六回「新島八重の生涯―進取と矜持―」展、第三七回「目的の大なる人物を―創設期の学生たち―」展である。第三七回企画展は、平成二二年（二〇一〇）に同志社が創立一三五周年を迎えるのにあたり、「あらためて創設期の学生たちを取り上げ、創設期同志社の学生たちの、将来に対する溢れんばかりの思いの一端を、その環境・学問・生活などを通してうかがおう」としたものであった。⁽²⁵⁾

佛教大学は平成二〇年（二〇〇八）四月、アジア宗教文化情報研究所を改組した宗教文化ミュージアムを開館させ、同館で常設展示として大学史関係資料の一部を展示している。また大学史関係の企画展としては、研究所時代の同一九年（二〇〇七）に、本学教授であった民俗学者、竹田聴洲の人と学問を回顧する企画展示を行った。

ミュージアム改組後は、同二〇年（二〇〇八）に本学が所蔵する京都関係資料を用いた展示、同二一年（二〇〇九）は大学史と関連させ、「近代浄土宗の傑僧 養鷗徹底上人とその著作」展を開催した。翌年は開学一〇〇年を二年後にひかえることから、それを記念する大学史関係展示を本格的にスタートさせたが、同年は本学前身である佛教専門学校を振り返る特別展示「佛教専門学校のこころ―新百年にむけて―」を開催した。

本学建学の起源は明治元年（一八六八）、知恩院山内の源光院に設けられた仏教講究機関である。その後、宗内教育制度の近代化と整備によって高等教育機関は発展し、大正二年（一九一三）、東山鹿溪の地に佛教専門学校が開校した。これが本学前身にあたり、昭和二四年（一九四九）四月、新制佛教大学が誕生したのをうけ、同二六年（一九五二）に最後の卒業生を送り出すまでの三六年間、多くの人材を輩出した。特別展示は佛専を回顧する初の展示で「先人達が築き上げた「佛大人」のスプリットを感じて」もらうことを目的としたものであった。⁽²⁶⁾

さて最後に、準備中の大学博物館についても、若干、言及しておきたい。現在、大学博物館開設準備を進めている関西学院大学では博物館設置準備室を設置し、開館にむけて着々と準備が進められている。すでに展示会を

開催し、内外にその活動と目的、理念などを周知しているが、資料収集に関する方針については七項目を選定している。そのうち、関西学院に関する歴史史料およびキリスト教関係資料、関西学院の教育研究活動の成果として展示できる資料および関連史料を定めており、関学の大学博物館においても、大学史関連および同大学の研究教育活動成果で得られた資料などが収集の柱となっていることがわかる。²⁷⁾

第三節 大学博物館と写真資料

大学博物館(博物館相当施設を含む)には、母体組織である設立法人や大学本体、大学史編纂室などの学史資料、あるいは所属していた研究者や、ゆかりのある研究者が撮影した学術調査写真、記録写真などを多数、所蔵している例が多い。学術調査写真とは学術調査にともなって得られた記録写真をいうが、性格としては、被写体自体の資料性、歴史性を有する。とりわけ、戦前や戦後の高度経済成長前の景観、風俗などは、近代史や現代史、民俗学、人文地理学、景観学(景観資源学)などの研究対象として活用されるものである。また伝存形態や撮影された写真を読み解くことによって、その研究者の思想や学問志向、姿勢を考えることができ、学問史の一翼を担う、貴重な資料群となりうる。

大学博物館に限ったことではないが、写真資料は資料群としては膨大な数量となることが通例であるため、専門的な整理のもと、データベース構築は欠かせない。さらに、一般にむけた、検索や視認性をもつ整理方法が模索されるべきである。これはデジタルベース化にしろ、冊子体にしろ、共通しているといえよう。また、オリジナルそのものを展示することは資料の劣化を進める度合いが高いことから、複製やデジタル化が必要である。これらの点については前述した各大学の研究プロジェクトの整理方針などが参考となろう。ここで特筆しておく

たいのは、今後の写真資料の整理を行なう際、古文書学や記録史料学の方法論を参考にして、整理前に、整理対象の写真資料群の全体構造を把握するようにすることである。これは原秩序の復元を可能ならしめるうえからも重要な作業であるが、大学が所蔵する写真資料の場合、伝来経緯や現状が確認されないままに整理が開始されてしまうことや、長年、学内の部署内で移管が繰り返され原秩序ほかの情報が確認できない状態で保管されてしまうことが多い。したがって、今後はこのような点に留意しながら作業をすすめるべきである²⁸⁾。

データベース公開は研究機関としては、資料公開という公共性の充実という観点から行なうべきものであるが、写真資料のデジタル化とデータベースによるWEB公開は、閲覧による資料の劣化防止と、資料検索性の向上、WEB公開による資料の公共性の担保の観点から重要である。ただ、大学博物館の写真資料データベースは自校の文化遺産の公開という面だけでなく、文化財産・文化資源を通じた大学広報の性格ももつといえる。というのは、公開しているデータベースとその画像データは所蔵資料目録と研究教育活動への利活用を促進することはいうまでもないが、所蔵写真資料そのものが大学の歴史や沿革、建学の精神・理念を体现するものも多く、近代史、教育史、博物館学の資料であると同時に、社会に対する大学そのものと大学理念の周知化を図れるからである。

大学ホームページを閲覧すると、ほとんどの大学がその歴史・沿革などを年表などによって紹介しているが、その際、関連する大学の写真を用いている。写真資料による大学のあゆみの視覚化は、社会に対する視認性・一般性を保ち、受験生や同窓生、社会へ訴えやすいものといえよう。これらは当然、大学所蔵、大学史編纂関係資料及び大学博物館所蔵写真資料である。たとえば、大阪府立大学の大学ホームページでは「府大のルーツを訪ねる」というバナーが設けられており、同大学の大学史編纂研究所による写真にみる府大史が編集されている。これらの写真資料はこれまで編纂された大学史の写真を主に活用されている²⁹⁾。

では次章において、具体的な大学博物館所蔵写真資料の検討を行ってみたい。

第二章 西田直二郎と旧蔵写真群

第一節

佛教大学宗教文化ミュージアムには佛教大学の研究者が遺した写真群などを所蔵している。その大半は現在、整理中であるが、そのなかでも特筆できるものが「西田直二郎博士旧蔵写真資料」である。

いうまでもなく、西田直二郎は戦前、戦中、戦後の歴史学を牽引し、西田文化史学を樹立した歴史学の泰斗であるが、その研究はこれまでほとんどなされておらず、近年、ようやく民俗学史のなかで考察されはじめた。したがって、西田に関しては正確な著作目録なども完備されていない³⁰⁾。そのため、これらの写真資料は今後の西田研究、あるいは史学史のうえからも、さらには近代日本の留学を考える教育史的観点からも重要と考える。

平成十一年1月、西田の養嗣子で、本学文学部史学科(改組され、現在、歴史学部)教授であった西田円我先生が急逝され、その後、ご遺族より蔵書や資料が寄贈された。このうち、蔵書類は養父西田以来、西田家が蔵してきたものも多く、それ自体、注目できるものであるが、寄贈された資料のなかには、西田直二郎の関わった仕事や事業類のものも存在する。

西田直二郎に関係する資料群は、大学から本館前身のアジア宗教文化情報研究所に移管され、整理作業を行う

こととなり、今日に至っている。本館移管前の伝存状況は、移管までに年数が経ってしまったことにより不明瞭であり、原秩序の復元は困難である。

本館ではこれらの資料群を、仮に「西田直二郎旧蔵資料」と名付けているが、内容を大別すると、京都史蹟名勝調査会関係資料と西田の身辺関係、旧蔵版本類、写真資料類などから構成されている。

本稿が分析対象とする写真資料群もこの資料群のなかのひとつであるが、「西田直二郎旧蔵資料」のなかの写真資料は一枚写真のものと、これまでガラス乾板と判断されていたが、実は木枠を用いた、今でいうポジと大きく区別される⁽¹⁾。このポジフィルムは一二点存在するが、大正期から昭和期にかけて、西田が撮影した写真フィルム保存のために行った処置と考えられ、当時の写真フィルムの保存、西田の写真に対する考え方などの一端がうかがえる。

被写体内容は、京都史蹟名勝調査会報告書のために使用する図版と、海外の遺蹟や景観などを撮影したもの、西田が書籍などから撮影したと思量される挿絵や銅版画などが混在している。とりわけ後者は一二二点のうち、四〇枚と全体の三分の一を占める。メモなどのテキスト情報がなかったため、撮影時期や場所などを特定することが難しいが、その内容から西田が大正九年（一九二〇）から二年間ヨーロッパに留学した際に撮影したものと推考される。これら留学時に撮影したとされる写真類に関しては、全国博物館学講座協議会西日本支部からうけた助成金により、一部の整理をすすめることができた。

西田のヨーロッパ留学は大正九年五月から同十二年（一九二三）の二年半におよぶ。日本遊船三島丸で、横浜を出航後、神戸、門司、香港、シンガポール、ペナン、コロンボ、スエズ、ポートサイド、マルセイユを経由してロンドンに到着している。当初はロンドンのロンドン大学に通い、その後、大正九年二月にケンブリッジ大学に

移っているが、同大学では、歴史学はもとより、ハッドンやリバースについて社会人類学の研究方法を大いに学んでいる。同一〇年（一九二一）には、ドイツのベルリン大学に移って、ラインプヒラ、ドイツ西南学派の文化史を批判的に継承し、翌一年（一九二二）、中東を中心に文明発祥地をめぐることが目的と決め、ギリシア、エジプト、シリアを巡り、再びギリシア、イタリア、南ドイツを訪問してからベルリンに戻り、アメリカ経由で同年二月一四日に帰朝している。

彼は往路ではカメラを持参せず、イギリス到着後に購入したことが妻宛の手紙から判明しており、被写体内容を見ると、ギリシアの神殿遺蹟やスフィンクスなどのエジプトといった中東の景観、あるいはヨーロッパの町並みが撮影されていることから、イギリス・ドイツ留学中と同一一年の中東訪問時のものと考えられる⁽³²⁾。

西田直二郎旧蔵写真群のうち、ヨーロッパ留学時に撮影されたと推考される写真四〇枚については詳細な撮影データがないため、撮影時期、撮影者、撮影場所などを同定、特定することができない。ただし、中東を歴訪した際に撮影したであろう写真群については、あまりに大まかだが、大正十一年であることは指摘できる。

西田の二カ年半に及ぶヨーロッパ留学の日程に関しては、前述したとおりであるが、留学最終年にあたる大正十一年は一年をかけてギリシャやエジプトなどの古代文明発祥地を見聞することとし、実行に移している。中東歴訪を決めたのは「シリア、アラビアとそれに英国、独、佛、と我日本の文明が果たして那邊にあるかを熟慮せなければならぬと思⁽³³⁾」い、さらに、

中世時代に於きまして、欧羅巴の文明が衰へた時この地の文明は遙かに西洋の文明を凌いでゐたのであります。今日に於きましては西洋乃至東洋の人達がこの国の文明を単に低い民族文明だと考へてゐる様であります。すがそう一概に捨て去るものではないと思ひます⁽³⁴⁾、

といったような、日本、日本文化を考えるにあたり、それを相対化するうえでエジプトなどの文明発祥地を見聞して相対化を試みようという考えからであった。

さて同十四年(一九二五)、佛教専門学校の研究機関誌『摩訶衍』第一卷第三号に、西田の「欧羅巴婦朝談」と題するヨーロッパ見聞録といった内容の講演筆記が掲載される。⁽³⁵⁾この講演は西田が佛教専門学校生に対して、自身のヨーロッパ見聞を巧みに引き合いにしながら、つぎのようなことを語っている。

「この度の旅行いたしました国々が如何なる所であつたかと言ふ事」と「如何なる国々が如何なる事情を背景としてゐたかと言ふ事」を「日本と比較して御話」した内容で、道德観の問題、個人の自覚、教育と宗教の關係などを論じている。明治維新以来、西洋思想をそのまま輸入したことによつて「在来の美しい日本の教育を根こそぎ」にし、それは「形の上のみでなく精神に於きましても同様」であり、その理由は「西洋の文明についてまだ充分な研究が足りないことに起因」しており、問題の解決には「己人の自覚」「社会道德の訓練」の必要で、これらは平素よりの国民個人々々の自覚、品性の向上にかかっていると述べたあと、品性の向上にはどうしても宗教上の訓練宗教の力にまたなければならぬと思ひます⁽³⁶⁾と話をくくっている。

浄土宗門の高等教育機関であることを意識したとも考えられるが、西田は『日本文化史序説』においても「人間の自我」の自覚に精神文化があると主張しているため、ここでの「自我」・「自覚」の深化と宗教の役割という指摘は、彼の理念の到達点のひとつともいえよう。

西田がいつ、どのような経緯で講演を行ったのかについては、「欧羅巴婦朝談」にも、また『摩訶衍』第一卷第三号の編集後記などにも記載されていないため判然としないが、講演録という性格上、数年経ったのち掲載されることは考えられにくいため、講演そのものは前年あたりではないかと推考する。講演開催の経緯もはっきり

しないが、佛教専門学校では設立当初から嘱託教授に、羽田亨（歴史、英語担当）、赤松智城（哲学、倫理、哲学史担当）を招いており、同書の前身、第一次『鹿溪』創刊号には土田善激、野々村直太郎、後藤澄心、梅崎舜興のほかに羽田も論文を寄せるなどしている。⁽³⁹⁾このように、西田が親しくする先学、同輩が佛教専門学校と関係があり、加えて西田の兄、菅原正隆が住持を勤めていたのが大阪の浄土宗寺院天寧寺であることなどを勘案すると、佛教専門学校から何かしらの依頼があつて講演を行い、その内容が口述筆記されて『摩訶衍』に掲載されたものと考えられる。

佛教専門学校の研究機関雑誌に、彼のヨーロッパ見聞の講演録が収録されていることから、前述した佛教専門学校の回顧展の際、佛教専門学校関連資料として、佛教大学宗教文化ミュージアムが所蔵する、西田がヨーロッパ留学時に撮影したと思われる写真資料群を写真パネル化し、写真パネル展「学者が撮ったヨーロッパ」展を開催した。西田が撮影したと考えられるこれらの写真は、九〇年前のヨーロッパ各地の風景や景観が被写体として確認される。これらの被写体情報は、歴史学、地理学、歴史情報学、博物館学といった分野にまたがる資料的価値を有するであろう。

これら中東地域への訪問時に撮影したと思われる被写体のうち、とりわけ、ギリシア方面の景観は比較的场所が特定しやすいので、試みに考察してみたい。

第二節 西田のギリシアと撮影写真

西田がヨーロッパ留学の最中、いつギリシアを訪問したのか、その正確な日付は定かではない。ただ、前述したように、留学最終年の大正十一年、エジプト、パレスチナ、シリアを巡り、ギリシア、イタリア、南ドイツを

訪問してからベルリンに戻り、アメリカ経由で同年一二月一四日に帰朝しており、

古代東方の諸国の巡歴を企てて、その春に埃及・パレスチナからシリアを経て小亜細亜に入り、沙塵にまみれた長い旅のつかれそのままに、スミルナの港から多嶋海を横ぎつて希臘に渡らんとした。⁴⁰⁾

と記していることから、同年春にエジプト、パレスチナ、シリアを巡歴したあと、トルコにはいり、スミルナ港からエーゲ海を横切り、ギリシャにむかったことがわかる。

この時期、ギリシャはトルコのイズミル（スミナル）一帯をセーブル条約で期限付きで領有していたが、大正一一年九月にはトルコ軍がこの地を奪還している。同時期、ギリシャとトルコはいわゆる希土戦争といわれる交戦状態にあったので、西田の旅程は厳しいものであったに違いない。西田の帰朝時期と帰国船の旅程、ギリシャ・トルコの情勢を勘案すれば、おそらく、トルコがイズミル（スミナル）を奪還する九月までにはスミナル港を出発し、ギリシャに入ったのではなからうか。

西田はギリシア訪問について、

船が進み、希臘半島の山々が、夜のあけゆく水平線に見え、漸次大きくなるころ、その緑なす山に白鳩のとまつてゐるやうの建物を遙かに見出したのである。これこそ希臘の古神話の海の神を祀れるスニヨンの神祠であつたのである。⁴¹⁾

とのべているが、スニヨンはギリシャのアッティカ半島の南端に位置する景勝地であるスニオン岬のことで、岬には海神を祀るポセイドン神殿が建っている。西田は船上より遙かに見出したポセイダンの神殿を見て、

海の波よす高山の緑の上に、ねむるがごとく静かに、大理石造の神の祠を建てた古代希臘人の心をまことに心にくく思うたのである。



図1



図2

この時私は博士の『希臘紀行』を卒然として思い出したのである。携へて来なかつた書であるのに不可思議に、鮮やかにこの書の文が浮びきたことを今もおぼへてゐる。⁴²

と回想している。博士とは浜田耕作のことで、『希臘紀行』はいうまでもなく、浜田のギリシャ旅行記をさす。浜田については多くを語る必要のないところだが、京都帝国大学において、わが国初の考古学講座を開講した考古学者である。ただし、彼は東京帝国大学文科大学史学科で西洋史を専攻し、古代ギリシャ、ローマ美術関連の論文や本邦初の古代ギリシャ美術の講義を開講した学者の一面をもつ。

浜田は明治四十二年（一九〇九）に京都帝国大学文科大学講師として赴任し、大正三年（一九一四）から二カ年、ヨーロッパ留学を果たしている。留学中、彼はギリシャを訪問しているが、そのおりの紀行を単行本として出版したのが、『希臘紀行』で、刊行は大正七年（一九一八）のことであつた。西田は浜田の紀行文を思い出しながら、ボセイドン神殿を見つめつつ、ギリシャ入りしたのであつた。

その風景を撮影したと推考される写真が図版1⁴³、同2⁴⁴である。メモなどのテキストが残されていないため、正確な撮影時期・撮影場所・撮影者などは特定できないが、おそらく、撮影場所は船上ではなく、この神殿を訪問して撮影したと思われ、撮影者は西田と考えられる。

ギリシャでの西田の旅程は判然としないが、

私の希臘の旅のうちにあつて、このスニヨンの神祠と、アテネの町のホテルの窓から、アクロポリスの丘が仰がれ、歴史的な古建造の上に月が冴えてゐたことは、歴史なるものに対して、一種敬虔な念を催はし、これをながめたものであつて、今も忘れられぬことである。⁴⁵

とあることから、スニオン岬のボセイドン神殿見学のあと、アテネ入りしたと推測される。アテネのどのホテル



図3



図4



図5

に旅装を解いたかは定かではないが、このホテルの窓からみたアテネイのアクロポリスと冴える月の情景が、西田のギリシャ紀行のなかで忘れぬ一景になったようである。

図版3は⁴⁶⁾そのアテネイのアクロポリスを撮影したものと考えられるが、この一葉も正確な撮影時期・撮影場所・撮影者などは特定できない。ただし、被写体の位置などから西田がホテルより撮影した可能性を指摘できよう。右掲史料のなかにも「アテネの町のホテルの窓から、アクロポリスの丘が仰がれ、歴史的な古建造の上に

月が冴えてゐた」とあるが、宿泊したホテルからシャッターをきったのもかもしれない。

図版4はギリシャの神殿と思われる建造物と不特定の人物が被写体の写真である。この人物が西田であるのかは明瞭ではない。図版5もギリシャの神殿と思われる建造物と不特定の人物が被写体の写真である。この図版ではふたりの人物が撮影されているが、むかつて左の人物は図版4と同一人物と推定される。図版5のふたりのうちいずれかが西田である可能性は高い。

おわりに

以上、大学博物館そのものと、大学博物館が所蔵する写真資料について、若干の考察を試みた。大学博物館は場合によっては一〇〇年近い歴史をもつ館も存在する、近代史や教育史、博物館史のうえからも等閑視できない存在である。大学博物館の意義や役割については議論されているところだが、その歴史的展開などについても今は検証していくことが求められよう。とりわけ、博物館史では比較的言及されてきていないため、各大学博物館の沿革と史資料の蒐集、関係した研究者との関係など、史学史のうえからも、今後、論じられていくべきものと考ええる。

また現在における大学博物館活動の意義を、大学史と大学史編纂、教育面でのFDとの関係、自校史・自校教育の開講と展開、さらには学内事業としてのホームカミングデーでの役割などと関連付けて分析することにより、より大学博物館の意義を掘り下げることができると考ええる。この点は別稿を用意している。

収蔵資料としての写真資料は、一般博物館以上に、写真資料という、重要な近代の「文化財」が集積され、数多所蔵していることが多い。したがって、写真資料の整理・保存、データベース公開による活用、さらには、研究資料としての写真資料の分析方法論の提示、写真資料を用いた展示活用方法の検討などについても、大学博物館が方法開発をしていくべきである。とはいいながら、本稿では大学博物館における写真資料の意味について概略的な点を述べたにすぎない。この点については今後の課題としたい。加えて、佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵の西田直二郎関係写真資料の一部を紹介したが、撮影場所や時期などの同定を急がなければならない。

注

- (1) 東京大学大学院情報学環・学際情報学府文化資源統合アーカイブ「歴史写真資料とは」。http://cr-arch.chiui.u-tokyo.ac.jp/hdadb/collection/hp.html
- (2) 従来の写真史については、概説として飯沢耕太郎監修『カラー版 世界写真史』（美術出版社、二〇〇四）を参照。
- (3) 前掲注1。
- (4) 國學院大學学術フロンティア「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」、立命館大学「京都映像文化デジタルアーカイブ マキノプロジェクト」など。
- (5) 日本写真学会画像保存研究会編『写真の保存・展示・修復』（日本写真学会、一九九二）。
- (6) 右学会誌特別号『写真と文化財との関わり』（同右、一九九二）。
- (7) 大林賢太郎氏『写真保存の実務』（岩田書院、二〇一〇）。
- (8) 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編『劣化する戦後写真 写真の資料化と保存・利用』（岩田書院、二〇一〇）

- (9) 全国博物館学講座協議会西日本部会編『新しい博物館学』（芙蓉書房出版、二〇〇八）八三―八四頁。
- (10) 右同、二〇六頁。
- (11) 大阪歴史博物館ホームページ「当館の使命と目標」。http://www.mus-his.city.osaka.jp/kan_info/shime.html
同右。
- (12) 大学博物館等協議会リーフレット。
- (13) 『京都大学百年史』第一巻第二章第二節「史学科」参照。
- (14) 『京都大学百年史』第一巻第二章第二節「史学科」参照。
- (15) 京都大学文学部国史学講座読史会編『回顧五十年』（京都大学文学部国史学講座読史会、一九五〇）五八頁。
- (16) 同右、八頁。
- (17) 『京都大学百年史』および京都大学総合博物館ホームページ「沿革」。http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/mudules/about/about/history.htm
about/about/history.htm
- (18) 前掲注14。
たとえば、貝塚茂樹氏は史学科研究室が置かれていた陳列館における学問的雰囲気、水野清一氏の追悼集『水野清一博士追悼集』（八一頁）でつぎのように語っている。
当時の京都の文学部では、西田幾多郎博士の影響もあって、学問の方法論が盛んに論議されていた。京大文学部史学科の陳列館の地下の溜り場の炬を囲んで、絶えず歴史学とは何ぞや、文化史とは何か、という方法論の議論が交はされていた。国史の肥後和男・山根徳太郎・池田源太などとともに、論争を執拗に交られていたのは水野君であった。
- (19) 前掲注15、二五頁。
- (20) 前掲注17。
- (21) 同右。
- (22) 大谷大学ホームページ「博物館について」。http://www.otani.ac.jp/kyo_kikan/museum/nab3mq00000017q8.html
- (23) 佛教大学宗教文化ミュージアム発行リーフレット。

(24) 『宗教文化シアターの活用と実践―無形文化財の舞台上演と資料化・情報化に関する研究―』（佛教大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇七）参照。

(25) 同志社大学社史資料センター第三七回企画展概略より。

(26) 「ごあいさつ」（佛教大学宗教文化ミュージアム編『佛教専門学校のこころ―新百年にむけて―』一頁）。

(27) 「関学コレクションをめぐる」〔『Museum News』第三号、二〇一〇〕一頁。

(28) 中村耕作「學術調査写真の整理・公開の現状と課題―大場磐雄博士写真資料整理をふまえて―」（『国学院大学学術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究 第二集』国学院大学、二〇〇五）

(29) 大阪府立大学ホームページ

(30) 西田の生涯と学問に関する研究としては、柴田実・西田朝日太郎編『西田直二郎 西田真次』（日本民俗文化体系一〇、講談社、一九七八）がある。近年、西田に関する研究は民俗学、思想史の立場から盛んになりつつあるが、ここでは、蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会について―関西民俗学の黎明―」（『京都民俗』第一九号、二〇〇一）、菊地暁「主な登場人物―京都で柳田国男と民俗学を考えてみる」（『柳田国男研究』第四号、二〇〇五）、同「京大国史の『民俗学』時代―西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力」（『近代京都研究』思文閣出版、二〇〇八）。林淳「文化史学と京都」（『柳田国男研究』第四号、二〇〇五）、拙稿「西田直二郎と民俗調査―田楽の映像記録撮影を中心に―」（『佛教大学アジア宗教文化情報研究所研究紀要』第四号、二〇〇七）。同「西田直二郎とヨーロッパ留学」（『佛教大学宗教文化ミュージアム』第五号、二〇〇八）。

なお、ここで、西田の生涯について簡単ではあるが、まとめておきたい。

西田直二郎は、明治一九年（一八八六）十二月三日、大阪府東成区清堀村三十三屋敷（現天王寺区城南清堀町）に、西田弥三郎、たねの次男として生まれた。五人兄弟の末子にあたり、長兄は天王寺近隣に所在した浄土宗寺院天然寺の住職、菅原正隆である。西田は戦後すぐ当寺の住職となっている。

明治三二年（八九九）四月、西田は大阪府立天王寺中学へ入学し、その後、同三七年（一九〇四）九月、第三高等学校第一部甲に入学、同四〇年（一九〇七）七月卒業し、九月に京都帝国大学文科史学科に入学している。同年九月

に同帝国大学大学院に入学、同時に副手に任じられ、内田銀蔵・三浦周行・原勝郎がその指導にあたった。大正八年（一九一九）六月、彼は京都帝国大学助教授に昇格、翌七月には内田が急死したため、その講座を引き継ぐこととなった。同年五月より二年半の在外研究を命ぜられ、イギリス・ドイツに留学している。同十二年はもっぱら諸国、特にギリシャやエジプトなどの文明発祥の地を訪れることに費やし、同十二年（一九二四）に帰国、その年の五月十二日、『王朝時代の庶民階級』で学位を授与され、九月に教授に昇格、大学において後進指導にあたり、多くの逸材を輩出した。戦後、昭和二十一年（一九四六）六月二六日、西田は国民精神文化研究所研究員で勅任官であったことを理由に、「教職不適格者」に指定され、七月二二日、京都大学はGHQより「教職不適格者」に指定された西田を免官とした。定年まで四ヶ月あまりであった。

大学を免官となった西田は、その年の九月に知恩院で得度出家し、天然寺の住職となる。僧名を直二（ちよくじ）といた。この寺は既述したように、彼の兄菅原正隆氏が住職であったが、戦後すぐに正隆氏がなくなり、後継者であった子息が出征したまま行方不明となっていた。そのため、檀家がその存続が危ぶみ、西田にその後継となることを求め、彼もそれに応じたのである。直二と名を改めてはいるが、普段はこれまでの直二郎で通している。

昭和二十六年（一九五二）十月には「教職不適格者」の指定が解除され、翌年の二月、京都大学より名誉教授号が授与されている。同三三年四月、京都女子大学の専任教授となっている。同三九年（一九六四）二月二五日午後九時、京都大学病院で死去、享年七九。同月二七日、京都市百万遍知恩寺内寿仙院において葬儀が営まれた。

(31) 株式会社光楽堂よりご教示を得た。

(32) 拙稿「西田直二郎とヨーロッパ留学」〔『佛教大学宗教文化ミュージアム』第五号、二〇〇八〕。

(33) 『摩訶衍』第三卷第二号、一一一頁。

(34) 同右。

(35) 『摩訶衍』とは、佛教専門学校の研究機関誌で、同校の前身、宗教大学分校が校友会の機関誌も兼ねて発行した『鹿溪』、これを引き継いだ第二次『鹿溪』が同九年（一九二〇）一月第七号をもって終わったのをうけ、同年八月に第一巻第一号として創刊されたものである。その後、昭和十四年（一九三九）に『佛專学報』と改称し、宗学のみならず、仏教学、

哲学の論叢となり、佛教専門学校が佛教大学に昇格すると、『佛專学報』は『佛教大学学報』、さらに『佛教大学研究紀要』へと引き継がれることとなった。本書は広く宗学、学会に寄与した。

(36) 『摩訶衍』第三卷第二号、一二〇頁。

(37) 同右、一二五頁。

(38) 同右。

(39) 佛教大学史編纂委員会『佛教大学史』一九七二、一四二～一四三頁。『鹿溪』創刊号(鹿溪会、一九一〇)をみると、羽

田は「迦膩色迦王の年代に就いて」と題する論考、赤松は同書四号に「戦争と宗教」という論考を寄せている。

(40) 西田直二郎「追憶の二三」(京都帝国大学考古学教室編『浜田先生追悼録』京都帝国大学考古学教室、一九三九、四八一頁。

(41) 同右。

(42) 同右。

(43) 佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵。

(44) 同右。

(45) 前掲注40。

(46) 佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵。

(47) 同右。

(48) 同右。

付記

本稿は平成二一年度全国博物館学講座協議会西日本部会研究助成「大学博物館所蔵写真資料の展示活用に関する学際的研究」の研究成果の一部、文部科学省科学研究費補助金若手研究Bの研究成果の一部である。

西田直二郎のヨーロッパ巡歴の道程や、撮影された写真の風景などに関して、佛教大学歴史学部の塚本栄美子先生よりご教示を得た。謹んで深謝申し上げます。